

タイ東北部における郡（アンプー）の社会史

— マハーサーラカーム県チェンユーン郡を中心として —

藤 井 勝

1 視点

筆者は東北タイの社会や地域について数年来研究を進めてきた。そのなかで、とくに関心をもつようになった存在がアンプー (อำเภอ) である。アンプーは、日本語に訳す場合には、一般には「郡」となる。日本における郡（こおり）は国（くに）とともに古代以来の歴史をもち、封建的統治制度下では支配制度上の単位としては十分機能することはなかったものの、社会的意味をもちつづけた。そして幕藩体制が解体され王政復古となった近代には郡自身も復古して、明治期に発足した地方制度下では重要な行政単位となり、郡役所も設置されることになった。その後、市町村レベルの地方行政・自治を強化するという理由から郡制は1923年に、郡役所は1926年に廃止されることになったため、その後は地方行政や地域社会の中での重要性を失ってきた。平成の大合併では、郡内の町村合併によって新しい市が数多く創設されたために、「郡」という名称そのものが失われた地方も少なくない（藤井 2010：5-13）。これに対して、タイにおけるアンプーは、19世紀末におけるバンコク王朝主導の地方行政改革のなかで全国的に制度化され、郡役所も設置されることになったものの、それ自身は近代以前から存在してきたムアン (เมือง), とくに小ムアンを実質的に継承するものであるという点で、日本の郡と同様、むしろそれ以上に歴史的制度として重要性を有するとともに、設置されて今日に至るまで地方行政制度の要として機能し続けてきた点で日本とは異なる。

したがってアンプーは、良くも悪しくも地方の社会生活に強い影響を与えてきた。タイの地方社会が日本の地方社会と異なった様相をもって立ち現れてくるとすれば、その異なった姿を生み出す要素としてアンプーの存在の意味は大きい。しかしながら従来の研究では、このアンプーについての系統的な研究がなされてきたとは言い難い。日本における郡の研究が貧弱であるのと同程度に研究の蓄積がないのではなかろうか。日本では、戦前に郡制度が廃止されたから、郡や郡社会への学術的関心が低下したこともうなずける面があるが、タイではアンプーは社会的に重要な役割をもってきたにも関わらず、地方行政学などの限られた分野を除けばあまり学術的な関心を集めていない。現地研究者もさることながら、欧米や日本の研究者によるタイ研究でもあまり魅力的な研究テーマではなかったように思われる。むしろアンプー内部の都市（あるいは町）や村などの地域社会の研究が多い。実際、これらの地域社会では今日、地方行政・自治組織が整備されつつあり、市自治体 (เทศบาลเมือง), 町自治体 (เทศบาลตำบล), 行政村 (ตำบล) 自治組織 (องค์การบริหารส่วนตำบล) = 通称「OBT」などが設置さ

れて、公選による代議員制度の下で運営されている¹⁾。アンプー内の市町村には議会制度があるのにアンプーにはないという状況も、研究者の関心を弱める要因であるかもしれない。しかしながら、アンプーは単なる中央官僚の末端出先機関、そしてその行政範囲である以上の社会的存在であり、そのあり方は、日本の郡の過去、現在、未来を考える上でも大いに参照されるべきものと思われる。

ところで、本稿はこのようなアンプーを社会史的に考察するものであるが、その場合、重要な視点は、すでに述べたようにアンプーが小ムアンを継承していることである。タイ族における地方社会形成の論理はムアンであり、中国西南部から東南アジア大陸部までムアンは伝統的に広く分布し（なおムアンの発音は、タイ族の地方化によって、少しずつ異なる）、タイ族社会の基本的な枠組みをなしてきた。そしてタイ国にあってはムアンは近代以前から階層化が進み、各ムアンは並列的な関係におかれているのではなく序列的な秩序の中に置かれた。バンコクを中心とする畿内の外側における大ムアン（เมืองใหญ่）と小ムアン（เมืองน้อย）、あるいは地方ムアン（หัวเมือง）と、その属ムアン（เมืองขึ้น）の関係である。この関係は19世紀末における地方行政制度の変化（バンコク王朝による近代化をともなう中央集権化）によって、チャンワット（จังหวัด）＝県（ただし初期はムアン）とアンプーの関係に置き換えられた。ここに初めて、ムアンはチャンワットとアンプーという異なった名称をもつことになった。そしてムアンという用語は、チャンワットの中心地であり、県庁が所在するアンプーをアンプー・ムアン（อำเภอเมือง）と行政上で呼ぶことによって継承された。しかし名称が変わっても、チャンワットやアンプーにはムアンの論理や伝統が息づいており、地方社会の人々はそれらを自分たちのムアンとして内面化しながら、日々の地方生活を実践している。

本稿で取り上げるタイ東北部でも以上のムアンの歴史的展開がみられたが、地方的割拠性はとりわけタイ東北部では根強かった。バンコク王朝からみれば東北部と同じく周辺性の強いタイ北部は小王国化が早くから進行して、いわゆるランナー・タイ（ล้านนาไทย）、そしてそのなかにおけるコン・ムアン（ขุนเมือง）＝ムアン人としての意識は明確に存在した。しかしながらタイ東北部は、それ自身を一つにまとめる広域の地方権力は存在せず、19世紀初めまではムアンごとにタイやラオスの王朝に対してゆるやかに帰順していた。またタイ東北部の歴史そのものは古く、先史時代にも遡るが、今日の主要民族であるラーオ族による流入と、彼らによる地方社会の形成は比較的新しく、19世紀までは流動性も強かった。住民の多くを占めるラーオ族は今日でこそ、コン・イサーン（คนอีสาน）＝イサーン人としての意識が強いが、それは近代以降のタイにおける政治的経済的過程のなかで創造されたものであり、伝統的には漠然とした「ラーオ」意識が存在したに過ぎず、各ムアンに対して第一次的な帰属意識をもっていたものと考えられる（藤井 2011）。こ

1) 町自治体や行政村自治組織が郡の監督下にあるのに対して、市自治体（なお一定規模以上の市は、特別市自治体 [เทศบาลนคร]、あるいは直訳すれば「都自治体」となる）は県の監督下に置かれるので（橋本 1999a:11）、市自治体と郡の関係はすこし複雑である。その意味でタイの市自治体は日本の市に近い状況に置かれることになるが、日本のように行政区画として郡から分離はしていない。なお市自治体が存在するのは、バンコク周辺を除くと、多くは県庁所在地に限られている。

のようなタイ東北部の歴史的特質、加えて今日に至るまで顕著な農業の比重の高さなどからみれば、ムアンのなかでも小ムアンのレベル、つまりアンプーのもつ意義はそれだけ大きいように思われる。地方社会は政治的制度的にはチャンワットを頂点にしてなりたつが、地理的な広がりや偏在性もあって、人々の生活の中心はアンプーを単位にして動いている。今日でこそ交通手段（とくに自動車やバス）やインフラの整備によって、県庁所在地との交通も容易になったが、それは20世紀後半以降のことであり、それ以前には村人にとって県庁所在地は空間上も意識上も遠い存在であったろう。

本稿は、以上の視点から、図1のようなマハーサーラカーム（มหาสารคาม）県北部のチェンユーン（เชิงชั้น）郡を主な事例としながら、地方社会の形成と論理を考える。かつてはその北側のチェンチョム（จันทม）郡をも領域としたが、この郡は今日では新郡として発足している。チェンユーン郡の人口は63,004人、世帯は13,710（ただし2000年国勢調査）である。郡の中心地は郡役所や郡警察署のあるチェンユーン町であり、郡内の幹線道路沿いには商店や事業所が点在するものの、商業施設などが集中して市街地を形成しているのはチェンユーン町だけである。

2 郡社会の生成

2.1 郡形成の過程

マハーサーラカーム県が属するタイ東北部のなかの中部（今日のマハーサーラカーム県、カー

図1 マハーサーラカーム県



ラシン県、ローイエット県あたり）はメコン川の支流にあたるチー川流域に立地することもあり、古くより人々の住む地域である。先史時代の農耕遺跡であるバーンチェン（ウドンターニー県）にも近いし、8世紀ごろからの古代文化であるタワーラワディーの宗教遺跡も点在する。代表的なものとしては、ムアン・ファードート（カーラシン県）やプラタート・ナードゥム（マハーサーラカーム県）などがある。結界石（セーマー）文化も広範囲に見られる（星野 1990：85-86）。つまりこの地方には、10世紀以前より人々の生活、そのなかでの地方社会がみられたことになる。その後16世紀頃からのラーオ族の移住によってこの地の民族的構成は変化するが（実際には先住民であると考えられる南アジア系民族との同化も進んだであろう）、宗教文化などは継承されて今日に至る。古い宗教文化は仏教（とくにタワーラワディー期）・ヒンドゥー教（クメール期）であったが、ラーオ族も元来仏教・ヒンドゥー文化を受容した民族だったため、メコン川西岸側に移

住後もこの地にある宗教文化を排除・放棄するのではなく継承し、地方の重要な社会文化的な伝統のなかに統合しながら、それぞれのムアン社会を形成した（สุจิตต์ วงษ์เทศ, พ.ศ. 2549などを参照のこと）。そしてこのムアン社会、とりわけ小ムアン社会を20世紀から継承してきたのがアンブー＝郡である（以下では、原則としてアンブーは「郡」、チェンワットは「県」とのみ表記する）。

実際、チェンユーン郡とともにマハーサーラカーム県北部に位置するカンタラウィチャイ（กันทรวิชัย）郡やコースムピサイ（โกสุมพิสัย）郡では、郡の紹介文のなかにもこのような背景や視点を捉えることができる（マハーサーラカーム県文化事務所〔สำนักงานวัฒนธรรมจังหวัดมหาสารคาม〕HP参照。<http://province.m-culture.go.th/mahasarakham/home.php>）。

カンタラウィチャイ郡の紹介文によれば、この郡は古いムアンに起源をもち、古代にはムアン・カントーン（เมืองกันทง）と呼ばれ、チャオ・ムアン〔ムアン主〕が独立した支配を行っていた。その後ムアンの名前を変えて、ムアン・カンターティラート（เมืองกันทรวิชัย）となるが、年代記によれば、ムアン・カンターティラートは小暦147巳年（仏暦1328年＝西暦785年）に創設されたとされる。そして副王が代々王位を継承してシンチョン王（ท้าวลิ้นจี่）の時代に至るが、その王の息子であるリントーン王（ท้าวลิ้นทอง）が「残忍な心の持ち主であり、父親を捕まえて閉じ込め拷問を加え、命を奪う」という惨事を起こした。このためリントーン王はムアンの支配を継承し、また幸福や繁栄を求めたものの、死去した父親の呪いを受けたため、ムアンは繁栄することができず、「約1089年間の長きにわたって遺棄されたムアンのような状態であった」。そしてこの地にラーオ族が移住・定住した後、仏暦2417年（西暦1874年）に、4世王（バンコク王朝モンクット王）は、「カンターンラーン村（บ้านกันทรารัง）をムアン・カンタウィチャイ（กันทรวิชัย）として立てることをご許可なされ、プラ・パトムウィセツ（พระปฐมวิเศษ（กันทร））をチャオ・ムアンとすることを許された」。その時にはこのムアンはムアン・カーラシンに属することになった。そして「仏暦2443年（西暦1900）にムアン・カンタウィチャイが廃止されたため郡、すなわちカンタウィチャイ郡」となり、「仏暦2456年（西暦1903）にはカーラシン県から離れて、マハーサーラカーム県に属することになった」。また仏暦2458年（西暦1905年）には、郡役所を最初の場所から移し、コークプラ村のところに新しく建てた。このため一時期、カンタラウィチャイ郡はコークプラ郡と呼ばれた。

一方、コースムピサイの紹介文は、この郡の成立の起源をはるかラーンサーン朝（ラオスの最初の王朝）まで遡って説明している。つまりラーンサーン朝からナコーン・チャムパーサク（現在、ラオス国内）が分立し、そのナコーン・チャンパーサクの一部の集団が移住してムアン・スワーンナプーム（現在、ローイエット県スワーンナプーム郡）が創設され、そのムアン・スワーンナプームの一部の集団が移住してムアン・ローイエット（現在、ローイエット県）が創設され、さらにそのムアン・ローイエットからムアン・コースムピサイが1896年に正式に分立したとされる。ムアン・コースムピサイの中心となる集落が形成されるのは1870年頃で、マハーサーラカームのチャオ・ムアンの命によって、腹心であるスリヨー王（ท้าวสุริโย）や副王の居住地が建設されるとともに、農民の移住・定住も進んで成長したとされる（3つに地区分けされるまでになった）。その後、チャオ・ムアン自身が隠居するためにこの地に移住し、すでに住んでいた副王が次のチャオ・ムアン

になって、マハーサーラームに戻った。その後、新チャオ・ムアン（マハーサーラカーム）の申請をバンコク王朝のチュラーロンコーン王が承認して、ムアン・ワーピーパトゥム（วชิระภูมิ）〔現在のマハーサーラカーム県南西部に立地〕とともにムアン・コースムピサイが正式に設立された。初代のチャオ・ムアンは先代のチャオ・ムアンの腹心であったスリヨー王（ท้าวสุริโย）〔欽賜名はพระสุนทรพิพิธ〕が任命されたが、直後のタイの地方制度改革により、「พระสุนทรพิพิธが最初の郡長（นายอำเภอ）となって役職を維持することによって、ムアン・コースムピサイは廃止されアンブー（郡）・コースムピサイになった」のである。

したがってムアンとしての歴史そのものは短いことになるが、ムアン・コースムピサイの中心地となったホークワーン（หอขว้าง）村の縁起と深く関係している仏像の「工芸的特徴から推測すれば」、この村の一帯には古くから人が住んでいたと推定されている。つまり「クメールの権力が栄えていた仏暦約1300年～1700年に人々が来て地方の基礎を造って住んだものと予測される。イサーン全体に見られるピマーイの石城・・・などと同じ時代である。その後約200年間放置されて廃墟となり、ついには木が茂ってジャングルになり、像、虎、熊、鹿、シャム鹿、猿などのさまざまな動物が沢山住むようになった」と語られる。

以上のように、真偽のほどは別として、タワーラワディー期やクメール期に遡る地域社会の起源さえ語られ、地方社会の豊かな歴史性が強調される。もちろん、古い歴史はそれぞれの事情（社会的あるいは自然的な要因が説明手段として使用される）によって一度途絶えたと説明されるが、その後に移住してきたラーオ族によるムアン社会形成のなかで復興・継承されてきたという物語が描かれている。そして近代の郡とは、従来のムアン制度が解体したために、新しい地方統治政制度の下でムアン社会を継承するものとして設立されたという理解が提示される。それだけ地方社会の人々のなかには、ムアン社会への強い意識やこだわりが存在していることになり、近代の郡社会にはムアンのようなものが重要な意味を持ち続けてきたことがわかる。すでに述べたように、ムアンは、中国西南部から東南アジア大陸部の盆地世界のなかに典型的に発達してきたもので、盆地的な空間的生態的構造と親和性をもっているように思われるが、そのような盆地世界からコーラート平原に移住してきた、タイ族の一派であるラーオ族が形成した地方社会のなかにもムアン文化、ムアン理念は継承されている。その意味では、ムアンは盆地という空間構造には還元できない文化的歴史的な構築物と捉える必要があろう。

もっとも本稿が主な対象とするチェンユーン郡の郡社会としての形成は比較的新しい。現在チェンユーン郡が属すマハーサーラカーム県は、もともとムアン・ローイエットに属する小ムアンであり、19世紀中葉に大ムアンとして独立し、19世紀末の地方制度改革を経てチャンワット（県）として再出発するが、この時には、チェンユーンはいまだ郡として存在しなかった。隣接するコースムピサイ郡やカンタラウィチャイ郡は小ムアンとしての前史をもったがチェンユーン郡はそうではなかった。チェンユーンは、カンタラウィチャイ郡内の一地域社会として出発した。郡資料は、この間の経緯を以下のように説明している。

「仏暦2436年（西暦1893年）頃、ムアン・ローイエットにあるバーン・ノーンポーン（บ้านหนองไผ่）

〔＝塩土池（沼）村〕の人々が移住し、チェンユーン衛生区（現在）の領域の西方にある池の近くで生計を立てた。そのムー・バーン（หมู่บ้าน）〔＝区（この場合は、集落としてのムラと考えてよい）〕の名前は、『ヤーンカム区（หมู่บ้านยางคำ）』であり、シー・スノン氏がナイー・バーン（นายบ้าน）〔＝区長（現在では一般には、プーヤーバーン<ผู้ใหญ่บ้าน>と呼ぶ）〕をつとめた。この区は、ムアン・カーラシンのクウェーン（แขวง）〔ひとつの地域区画の名称で、後述のタムボンに相当〕・ノーンソーンの行政区画に属していた。その後、移住によって人口がさらに増加して数多くなったが、田野が各方向を囲んでいるので区の範囲を拡大することができず、人々は他へと出て行った。そこで区の人々は以下のような意見をもつようになった。区の東方向には広大な森があり、それはチェンユーン池（沼）（หนองเขืองฮื่น）という大池に近い。そこを新しい区を設置する地区としよう（この場所はかつてムアンのあったところと推察される。クメールが権力を輝かした時代に、一つのムアンがこの地に存在したが、後に放棄されていた。なぜなら採掘人が、古代クメール期の瓦片、陶土、そして煉瓦をチェンユーン池の区域の平地で発見しているからである）。そしてこの新しい区をバーン・チェンユーンと名付け、今日に至っている。この地域社会が大きくなり、区が大きくなったので、当局は、マハーサーラカーム県コークプラ郡（現在はカンタラウッチャイ郡）の行政区画のなかに、タムボン（ตำบล）〔＝行政村〕・チェンユーンを設置させた。

仏暦2492年〔＝西暦1949年〕に内務省は、タムボン・チェンユーンの行政区画を分けて、3行政村を設置し、それらはマハーサーラカーム県カンタラウィチャイ郡の行政区画に属することを布告した。すなわち1. タムボン・チェンユーン、2. タムボン・チュンチョム、3. タムボン・クートーンである。

仏暦2501年〔＝西暦1958年〕8月16日に内務省は、カンタラウィチャイ郡の行政区画を分割して、以下の4つのタムボン領域から構成されるチェンユーン準郡を設置した。すなわち1. タムボン・チェンユーン、2. タムボン・チュンチョム、3. タムボン・クートーン、4. タムボン・ノーンソーンである。

その後仏暦2502年〔＝西暦1959〕に、内務省はチェンユーン準郡を昇格させ、チェンユーン郡とした。」（ที่ทำการปกครองอำเภอเขืองฮื่น, พ.ศ. 2546より抜粋。〔 〕内は筆者の説明や翻訳である。）

つまり郡としてのチェンユーンの歴史は、約半世紀にしか過ぎない。チェンユーンの起源となる村落が最初に形成されたのは19世紀末であり、その後、集落の移動や拡大が進み、やがてタムボン（行政村）²⁾ となっている。このタムボン・チェンユーンは、その後西暦1949年に3タムボ

2) 幾つかの村落から構成される行政単位であり、カムナン（กำนัน）という長が束ねる。日本において藩政村を幾つか束ねて設立された近代の行政村に類似した地域区画をもつので、ここでは「行政村」と訳す（ただし「区」あるいは「行政区」と訳す研究者も多い）。ただし日本の行政村とは違って、タムボンには役場や議会は置かれていないために、行政上・地方自治上の位置づけは相対的に低かった。しかしながら「タムボン評議会」が1950年代後半より徐々に設置され、さらに1990年代後半からは地方自治の強化の下で、既述の「行政村自治組織」（OBT）が設置されて、機能が強化されてきた（橋本 1990a：9・17）。なお「行政村自治組織」の長は行政村長（カムナン）とは別に存在するというように、従来の郡（アンプー）－行政村（タムボン）－区（ムーバーン）という縦の系統とは相対的に独立したかたちで「行政村自治組織」は成り立っている。その事務所も、行政村長とは独立したかたちで存在する。

ンに分割され、約10年後の1958年にはそれらが（ただしタンボン・チェンユーンはさらに2つに分割される）準郡としてカンタラウィチャイ郡から半独立し、その翌年には正式にチェンユーン郡が成立したのである。

このような展開は、タイのアンブーが日本の郡と相違して、近代以降、重要な役割を担う行政機関として機能してきたことによる。既述のように、日本では近代初頭における郡県の編成にあたって、古代より長らく継承されてきた郡の分割や統合が初めて幅広く行われたものの、それ以降は原則として郡区画の改編は実施されなかった。その後人口が増加したり、都市が発達したりしても郡の範囲は変化せず、「市」が設置されると郡の外側に置かれるという仕組みが採用された。郡制が廃止されてからもこの点は変わらなかった。これに対して、チェンユーン郡に見られるように、タイでは、郡は社会的実態に合わせて繰り返し再編されてきた。このため20世紀になってからも積極的に郡は創設された³⁾。

チェンユーン郡の設立を可能にした要因は何であったのか。戦後のタイ東北部開発の出発点となる、サリット政権による第一次国家経済開発計画の起点は1961年であるから、その要因は、それ前の段階における地方社会の変化と関係するだろう。スリン、ウボンラーチャターニー、コーンケン、ウドンターニーなどのように、バンコクからの鉄道が1920-30年代に敷かれた地域では商品経済の浸透も早かったが（柿崎 2000：135・298-299）、チェンユーン郡を含むマハーサーラカム県などはこうしたインフラ整備の外側に置かれていた。しかしながら、この地域を流れるチー川は、鉄道が敷設されたコーンケン県からマハーサーラカム県やローイエット県をへて、鉄道の敷設されたウボンラーチャターニー県でムーン川に合流したから、この地域はチー川の河川交通を通じてコーンケンやウボンラーチャターニーに繋がっていた。この鉄道と河川を利用して、多くの中国人達が1930年代以降この地域に入ってきたと言われているほどである⁴⁾。

このなかで、20世紀前半のチー川流域の農村地域はいまだ自給的であり、農業技術は古いものをそのまま使用している状態であったとされるものの（สุวิทย์ และ คารารัตน์ พ.ศ. 2538：33）、20世紀中頃には、19世紀末地方制度発足期における地方社会の状態からの変化が生じていた。たとえば、チー川流域では、鉄道の敷設が進んだ1930年代になると米の商品化が次第に見られるようになった。中国系を中心とする米商人達が農村部に入ってきて（彼らのなかには商売上の便益もあって村の女性と結婚をする者も多かったが、かならずしも正式な結婚ではなかった）、商品や現金との交換によって農民の余剰米の購入し（かれらの多くは金貸しでもあったため、農民に借金をさせて、その返済のために結果として飯米を供出させることも少なくなかったとされる）、それを鉄道駅の周辺の精米所に持ち込み（河川交通などを利用）、最終的には鉄道を通じてバンコクに

3) 郡だけではなく、実は県（チャンワット）さえも、既存の県のなかの一部地域が独立して新しい県を設立することを通じて増加してきた。例えば、タイ東北部には現在全部で20県あるが、それらのうち5県（ヤソートン県、アムナートチャルーン県、ムクダーハーン県、ノーブンアランプー県、ブンカーン県）は20世紀後半以降に新設されたものである。もっとも新しい県はノンカイ県から2011年に分立したブンカーン県である。

4) 中国人が地方の村落レベルまで入ってくるのは道路が整備されてからだとする見解があるが（Chamruspant, Viyouth et al. 1992：14）、一方では、中国人達はすでに大きな集落には鉄道の敷設とともに入ってきたという見解もある（สุวิทย์ และ คารารัตน์ พ.ศ. 2538：42）。

運んで販売した (สุวิทย์ และ คารารัตน์ พ.ศ. 2538 : 42-45)。ウボンラーチャニーまで敷設される鉄道の各段階における終点駅にはサイロと小さな精米所が併設され、1930年代になるとコーンケーンは精米中心地へと発展を遂げた。また農民の側では、従来の食用米であるモチ米だけではなく、販売用（特に輸出用）のウルチ米に作付け変更する傾向も生じたとされる (Phongpaichit and Baker 2002=2006 : 38-39)。そして米の部分的な商品化と並行しながら耕地の開墾も漸次進行し、タイ東北部全体でみるならば、1930年代には耕地は500万ライ程度あったものが、1950年代初めには1200万ライ程度にまで増加している (星川 2009)。20世紀後半にまで続く、イサーン農民の「良田探し」 (หาบาคี แฮร์・ナー・ディー) (倉橋 2007 : 60-61) が継続したのである。棉花や麻などの栽培、そして綿織物や絹織物の生産も見られた。

さらに注目されるのは、19世紀後半からバンコク周辺で拡大したプランテーション型の稲作が農耕用の水牛や牛の需要を高めたために、タイ東北部はその生産地として成長し、農家による畜産の拡大（自給用だけではなく販売用も）したことである。その販売と移送のためにナーイ・ホーイ (นายฮ้อย) = 隊長を中心とする牛追い隊の活躍が顕著になった (สุวิทย์ และ คารารัตน์ พ.ศ. 2538 : 46, Phongpaichit and Baker 2002=2006 : 39)。販売のために牛や水牛をタイ東北部より中部タイへ移動するのは新しく開通した鉄道ではなく、主にはナーイ・ホーイ達が担い続けた。販売のための時間の短縮はあまり重要なことでなかったし、経費が安かったからである (柿崎 2000 : 135-299-301)。そして牛追い隊は米商人達とは違って、地元のラーオ族（つまりイサーン人）の農民によって編成されるのが特徴であり、中国人商人に比べて農民からの信頼は篤かったとされる。筆者の調査村（チェンユーンの町から西南へ5キロほど離れて立地）の古老のなかにも牛追い隊に長年従事してきた人がいる。1932年生まれの彼は隣村出身で、小学校3年を終えると出身村で7人ほどからなる牛追い隊に加わり（1940年頃のことである）、その後経験を積んで自らが隊長になって牛や水牛の売買・輸送に携わった。このようにして地方の生活基盤の向上や商品経済の浸透は20世紀前半、とくに1920-30年代より次第に進行したのである。バンコク王朝の地方制度改革に対応して19世紀末から20世紀初めに進んだタイ東北部の地方社会の変化と混乱（藤井 2011を参照のこと）は次第に収束しつつあり、新しい社会経済的変化の時代を迎えつつあったといえよう。

同じ調査村の別の古老によれば、まだ10歳前後の少年期であった1930年代は、チェンユーンを中心地（当時はタムボンの中心地でもあった）はまだ農業集落という程度であり、今日のように中国系商人の店舗や常設の市場はまだ存在しなかったが、集落そのものは大規模化していた。そしてこの地方で唯一の中学校が集落内の寺に併設されたり、集落内に臨時の市場が開かれたり、人々が道端で物売りをしたりする光景がみられたとのことである。さらに別の古老によれば、この調査村から出かけて、チェンユーンで農作物を販売する者もあったとのことである。チェンユーンを中心集落が、純然たる農業集落から人や商品の集まる空間へと徐々に変化しつつある様子を垣間見ることができよう。またチー川流域の24ヵ村で行われたインタビュー調査によれば、タイ東北部の開発を方向づけた第1次国家経済計画（1961年より）の直前には、農業機械を使用する世帯は全体の約12%、害虫駆除薬を使用する世帯が約8%、化学肥料を使用する世帯が約1.8%、

改良種の米を栽培する世帯が約1.7%のとなっており（สุวิทย์ และ คารารัตน์ พ.ศ. 2538 : 33）、今日と比較すれば低い値ではあるものの農業のあり方にも変化の兆しがみられた。19世紀末の地方制度改革から約半世紀を経たタイ東北部の地方社会の生活は新しい姿を次第に現すようになっており、チェンユーン郡の成立の背景にはこのような社会経済的な変動があったのである。

2.2 設立期の郡—行政村—区

成立したチェンユーン郡の内部はどのようなになっていたのか。ここでは、表1のような、1965年の『チャンワット、アンプー、タムボン、ムー・バーン名簿 東北部（รายชื่อ จังหวัด อำเภอ ตำบล หมู่บ้าน ภาคตะวันออกเฉียงเหนือ）』（チュラーロンコーン大学タイ情報センター所蔵）にもとづいて、地方社会の編成という面から考察する。一部繰り返しになるが、まず用語の整理をする。

タイにおける村落、すなわち村（ムラ）は歴史的慣用的にはバーン（บ้าน）と表現される。そして村は一般には「バーン・○○」と呼ばれる。バーンは、一方では家やその屋敷地のことも意味するので日本人にとっては混乱することも多いが、タイでは語られる文脈のなかでどちらを意味しているかを判断している。19世紀末の地方行政制度改革のなかで、地方行政機構は県（チャンワット）—郡（アンプー）—行政村（タムボン）—区（ムー・バーン）というように垂直に再編された。この時に区（ムー・バーン）となったのは、原則として村（ムラ、つまりバーンである）であるから、近代以降、村（バーン）は区（ムー・バーン）であるというという理解が存在してきた。なおここでムー・バーンを「区」と表記するのは、タイにおけるバーンの「ムー・バーン」への移行が、日本における藩政村＝村（ムラ）の「区」への移行にほぼ対応しているからである。また既述のように、タムボンは村（バーン）が幾つか集まって構成されるという意味で、日本との比較では、日本近現代の「行政村」に対応する存在である。もっとも、その行政的機能は歴史的には弱く、近年の地方自治制度の拡充のなかで全国的に行政村自治組織が設置されるようになって、「行政村」としての実質が備わってきたというべきである（本稿の注2）を参照のこと。

1965年は、チェンユーン郡が設立されて約5年経過した時期であり、すでに政府による東北部開発（The Committee on Development of the Northeast 1961）が始動しつつある。この時、郡を構成するのはチェンユーン、クートーン、ノーンソーン、ラオドークマイ、チュンチョムの5行政村であるから、この短い期間に行政村がひとつ増加していることになる。具体的には、ラオドークマイである。各行政村はおおよそ10～20程度の区から構成されており、各区は基本的に一つの村（バーン）である。ただし村が複数の区に分割されている例もある。チェンユーン行政村では、3区、4区、5区がいずれもチェンユーンという名前をもっている。つまり郡役所のあるチェンユーン村はすでに1930年代より大集落化しており、その後商店なども開設されるようになった結果、このように村が複数の区に分割されたのである。ノーンソーン行政村では1, 2, 3, 5区がノーンソーンという名称をもち、15区と16区はポーンという名称をもっているから、前者ではノーンソーン村が4つの区に、後者ではポーン村が2つの区に分割されたことを示す。さらにクートーン行政村では、4区がカームビエタイ、5区がカームビエヌアという名称をもってい

表1 1965年のチェンユーン郡における行政村と区

チェンユーン เชียงฮิ่น 1965 年		現在	ノーンソーン หนองซอน (続き) 1965 年		現在	
1	マークヤーหมากหญ้า	チェン ユーン เชียง ฮิ่น	4	シーダーสีดา	ポー น ト น โ น ท อง	
2	ノーンギウโนนจีว		8	ノーンクーหนองคู		
3	チェンユーンเชียงฮิ่น		14	ノーンハイหนองไห		
4	チェンユーンเชียงฮิ่น		15	ポーนโพน		
5	チェンユーンเชียงฮิ่น		16	ポーนโพน	ドー ン ガ น ค อน จ ิน	
6	コークスーンโคกสูง		7	コーค้อ		
7	ノーンママオหนองมะเฒ่า		9	ソアートสาาด		
8	サーンケーウสร้างแก้ว		11	フェークแฝก		
11	ノーンウェーン หนองแขวง		17	ノーンサムラーนโนนสำราญ		
13	ノーンシリลาトหนองศิริราษฎร์		18	ด่อนการ์นคอนเงิน		
15	ノーンタップมาร์หนองทัพม้า	ラオ ドークマイ เหล่าดอไม้ 1965年		ค อน จ ิน		
16	นार्ट่อนนาทอง	11	ノーンウェーンหนองแขวง			
17	เบ็กแบก	12	ฟานोनหัวหนอง			
18	ด่อนนฮาร์นคอนหัน	13	ปัมคำ			
19	ノーンウェーンหนองแขวง					
9	ノーンスーン โนนสูง	スワタ オ	2	サムカム สมคม	ラ オ ド ー ク マ イ เหล่าดอ ไม้	
10	チャーณ จาน		4	ノーンปากウェーンหนองผักแว่น		
12	コークカーโคกข่า		5	クラブะกระบาก		
14	ノーンサワンโนนสวรรค์		6	ノーンクーหนองคู		
				8	ラオドークマイ เหล่าดอไม้	ノ ー ン ク น น อง ก ุง
クートーン กู่ทอง 1965年		1	クットช้อย์กุดจอก			
3	スワタオเสื่อเฒ่า	3	ルムเซ่น หลุมแซง			
6	เคนเชียง	7	บูเอื่อ			
7	ノーンサパンหนองสระพัง	9	ノーンクนหนองกุง			
13	ノーンシーサวัตโนนศรีสวัสดิ	10	ノーンปีม่าย โนนพิมาย	チュ ン ช อย ม ช ึ น ช ม		
14	โน่นลวหนองเรือ	チュンชอยมขึ้นชม 1965年				
1	クートーンกู่ทอง	ク ー ト น ก ู่ ท อง	1		ノーンワーหนองหว้า	チュ ン ช อย ม ช ึ น ช ม
2	ムアンแปนเมืองเพ็ง		5		ชอยมชีจอมศรี	
4	คาร์มปิเอไตขามเปี้ยใต้		6		นามชานผ้าจีน	
5	คาร์มปิเอสุา ขามเปี้ยเหนือ		7	โคกクラ้นโลกกลาง		
8	โน่นปุนชูหนองบุญ		8	โน่นซัมลีโนนสำลี	ク ャ ャ ッ ト プ ร า ด ุ ก ก ุด ป ลา ด ุ ก	
9	โน่นชาร์ตหนองชาด		12	คามเค่นคำกิ่ง		
10	โน่นมัมปラーหนองมันปลา		2	โน่นนาร์ไลเดียอู หนองนาไร่เดียว		
11	บูอาบ้านบัวบาน		3	นาร์เฟอร์ไนาฝาย		
12	ช้อย์โตโจด		4	กุตปラーดุกกุดปลาตุก		
15	กุลป๋อครุโพธิ์		ラオブ アバー ン เหล่าบัว บาน	9		โน่นเซ่นหนองแสง
16	ラオブアバーเหล่าบัวบาน	10		ด่อนสวาร์นคอนสวรรค์		
17	โน่นบูอาหนองบัว	11		โน่นตันโนนทัน		
18	โน่นลาร์มหนองล่ำ					
19	โน่นเด็นหนองเดิน					
ノーンソーン หนองซอน 1965 年		ノ ー ン ソ ー ン น อง ซ อ น	注) 名前の前の番号は区の番号である。「現在」の欄は、 2010 年時点の行政村の範囲である。			
1	ノーンソーンหนองซอน					
2	ノーンソーン หนองซอน					
3	ノーンソーン หนองซอน					
5	ノーンソーン หนองซอน					
6	キーจี					
10	ノーンชัก หนองจิก					
12	ラムラーน สำราญ					
13	มานะโน					

る。タイ (ไท) は「南」、ヌア (นุา) は「北」であるから、これらはカームビエ村が二つの区に分かれたことを意味している。

村を複数の区に分割する傾向は一部の集落でみられるが、全般的には各区は異なった名前をもち、区＝村（バーン）の原則が維持されている。「ノーン」という語彙を含む村名をもつケースが多くあるが、これは同じバーンであることを意味しない。「ノーン」には, นอง (nong) と โนน (noon) の二種類があり、発音は厳密には異なるが、本稿ではともに「ノーン」のカナ表記をしている。前者は「沼」、後者は「丘」の意味である。タイ東北部には沼地が多く、これらを田に開発したり、水源としたりしたので「沼」は村が存立する条件である。「丘」もまた村人にとって重要な意味をもつ。タイ東北部では雨季の雨や洪水によって田が満水になることによって稲作が可能になるが、高床式とはいえ、宅地を洪水の下に置くことは好まれないから、宅地は田よりは高い場所に建設される。集落はマウンドの上に建てられるので、村は「丘」にあるわけである。こうしてタイ東北部では、チェンユーン郡に限らず、村の名前に「沼」や「丘」が含まれることが多くなる。

もっとも各区で名前が異なることは、各区の住人が別方面から移動してきたことを意味してはいない。名前が共通していない場合も、個別にみれば、村落形成上で深い関係があることは少なくない。筆者の調査村が属する行政村は、ほとんどの村落間が本村一分村関係によってつながっていた（藤井 2003：230－232）。移住・開拓の過程では、最初に定住がなされた集落を拠点にしながら、一部の住民が周辺地域に分住するようになり、そこが新しい村（バーン）に成長したのである。もちろん分村は近隣集落からの移住者だけから構成されるのではなく、遠方からの移住者も含む。日本における開拓とは違って、広範囲の無主地の開拓を通じて定住するプロセスを経るので、既得権益者が開拓地にあることは少なく、移住・定住は比較的オープンになされながら新しい村落が形成されたのである。

この当時のチェンユーン郡内の様子を直接に示すことのできる資料は十分でないが、Keyesによる *Peasant and Nation: A Thai-Lao in a Thai State* (Keyes 1966)、水野浩一による『タイ農村の社会織』（水野 1981）や“*Social System of Don Daeng Village*” (Mizuno 1971)、そして Yatsushiro 編の *Studies of Northeast Villages in Thailand, Vol. I・II* (Yatsushiro ed. 1968) によってある程度うかがい知ることができる（タイ語の文献としては、東北部全般を対象とする『東北部村落の社会学』（ステーブ・スントーンパーサット編、チュラーロンコーン大学政治科学部、1968）があり、それにはKeyesを含む数名の欧米人研究者の論文も掲載されている）。Keyesは今日に至るまでアメリカを代表するタイ東北部研究者であり、彼の博士論文となったのが上記の研究である。この研究は、マハーサーラカーム県ムアン郡クワオ行政村内の1村落（マハーサーラカームの町から西南に約15キロに立地）を対象とした社会人類学的研究であり、1962～1964年のフィールドワークをもとに執筆されたものである。言うまでもなく、水野は日本におけるタイ東北部研究の先駆者であり、その研究はこの分野の金字塔である。彼の調査地であるドーンデー村（コーンケーン県ムアン郡ドーンハン行政村内）はチェンユーン郡から西南西に約30kmのところ立地しており、彼のフィールドワークは、1964年～1966年に主になされたとされてい

る（坪内 1980：175）。一方、Yatsushiro編のものは、アメリカが運営するタイ支援機構であるUSOM（United States Operations Mission to Thailand）が行った農村調査の報告書であり、1966年10月～1967年2月の間にタイ人研究者10名（USOMの職員のほか、タイ国学術研究会議〔NRCT〕職員や大学教員も含む）がサコンナコーン県ワナニワット郡内8ヶ村（バーン）、マハーサーラカーム県ムアン郡内4ヶ村（バーン）、そしてチェンユーン郡の隣郡であるカンタラウィチャイ郡内の5村（バーン）で実施したものをまとめたものである。

Keyesや水野の調査は学術的研究であり、Yatsushiro等の調査は実践的政策的な目標のもとに成されたこと、また調査期間の長短の差異があることなど、関心も方法も異なるが、共通していることは、東西冷戦体制構造下でベトナム戦争あるいはインドシナ戦争が激化し、東西対立最前線の一角ともいえるべき地理的位置にあるタイ東北部において、複雑に展開する権力や勢力と関係しつつ地域社会や民衆の生活が営まれている様子を浮き彫りにしていることであろう。伝統と近代、国家と地方、リーダーと民衆、共産勢力と村落といった関係性が織りなす、村落レベルの社会や生活の姿をうかがい知ることができる。水野の研究は家族、親族、村落などの社会構造に主に焦点をあてたため、当時の社会変動の側面の分析は相対的に弱かったものの（坪内 1980：183-4）、その考察の中には当時の社会状況の一端が示されている。そして実は、創設期のチェンユーン郡内、各行政村内、そして各区内でも、Keyes、水野、そしてYatsushiroグループによって明らかにされた同時期の近隣県・郡内の様相と同じような姿があったといえよう。牧歌的にもみえる地域社会のなかに複雑な政治問題が内包されていたのである。この政治状況は1930年代のタイ東北部には存在しなかったが、見方によればもう一つ前の時代、つまりフランスのメコン沿岸部へ進出に直面して、バンコク政府がタイ東北部をいかにタイ国（当時はシャム）に統合するかに腐心した時代（藤井 2011）と類似したものであったと言えるかも知れない。

3 郡社会の展開

3.1 国家開発政策と郡

1960年代からのチェンユーン郡の展開に大きな影響を与えたのは、前出の第一国家経済開発計画のもとで実施された東北部開発である。この開発はサリット政権によって立案されて1960年前半から開始され、農業基盤やインフラの整備を推進したが、上記のような政治的、あるいは国際関係上の動向への対応として、安定した地方を築くことを目的としていた。チェンユーン郡に限ってみるなら、チー川の支流であるポーン川の上流におけるダム、そして巨大貯水湖の建設による電化や灌漑の開発や、コーンケーン（コーンケーン県）―チェンユーン（マハーサーラカーム県）―ヤーントラート（カーラシン県）間の道路整備の影響は極めて大きかった。前者は電気使用による近代的生活、そして田の灌漑化による乾季の水田稲作（ただし灌漑水路周辺地域に限定される）を可能にして、生活や農業の質を高めることになった。また後者では、農村部からの農産物の輸送などが容易になることによる商品作物生産の発展、そしてチェンユーン郡の中心地がこの道路の中間地点沿線に立地したため、チェンユーン町の新しい発展の可能性が与えられることになった。

後者について詳述すれば、従来、この地方の中核都市であるコーンケー市とチェンユーン郡の間の交通は、道路が未整備のために自動車が十分に利用できず、約3時間を要した。しかしながら道路の完成によって30分程度に短縮された。しかも以前は雨季には洪水のために道路はしばしば切断されたが、1年を通しての交通が可能になった。1962年に計画が立てられ、最初は6メートル幅の未舗装道路を建設していたが、途中で部分開通した区間で車の利用率が高いことがわかったため、急遽アスファルト舗装を行うことになり、1966年に全体が完成した（Jittasatra 1967:6-8）⁵⁾。これによって稲作のほか商品的作物の生産量が増加した。ケナフは7倍、野菜は2.5倍、さらに豚などの家畜も6倍に増加している（1962年から1966年まで）。1966年1月頃にまだ建設中のこの道路を通してカーラシン、マハーサーラカムなどを短期調査した水野浩一は、この道路整備によってカーラシンの西半分はコーンケーの市場圏に入りつつあり、「ヤーグウタラードからはコーンケーに買い物に来るし、コーンケーからはケナフの仲買者が入りこむ」状況を報告している（水野 1966:157）。このような農産物の増加は、同じマハーサーラカム県内の他の郡ではあまり顕著ではなかったから、道路交通の利便性に支えられたものであることは容易に推察できる（Jittasatra 1967:17・22・38）。

さらに交通の利便性の強化にともなって商店や事業所も増加した。表2のように、1960年当時のチェンユーン郡には52の商店や事業所があった⁶⁾。この数字は、チェンユーンの中心地がまだ

表2 チェンユーン郡における商店と小規模事業所

	1960	1961		1965	1966
雑貨店	7	9		17	20
衣料品店や仕立て屋	25	34		44	45
薬局	0	0		1	1
飲食店	10	11		16	17
自転車の販売・サービス店	1	1		5	5
小規模精米所	2	9		11	12
建設器具販売	2	2		3	3
ホテル	1	1		2	2
その他	4	5		8	8
合計	50	72		107	113

注）（Jittasatra 1967:58）に掲載のものを編集。

5) 筆者はこの道路を利用してコーンケーと調査地を往復してきた。最初に調査に入った2000年頃はまだ片道1車線で、その外側にかなり広い路肩（未舗装）が未整備の状態であつて広がっていた。しかしながら数年前に舗装幅が片道2車線まで広がり、その外側の路肩もかなり整備されて、非常に快適な道路になっている。

6) 衣料品・仕立屋が相対的に多く、しかも増加しているのは、道路の開設を理由とするのではなく、この地方の農民の副業と関わっている。調査村での聞き取りなどによれば、この地方では農民による農作業服の縫製と巡回販売がかつては重要な副業であり、市販の既製服が普及するようになる1980年代までは副業としても成長し、多くの農民が携わっていた。このためこれに関する小事業所が多くなっているのである。もちろん、仕立屋などは必ずしもチェンユーンの中心地に立地したのではなく、農村部にも散在していた。

商業的な発達の初期段階にあった1930年代に比べれば大きく増加しているといえるが、道路の完成する1966年までの5年ほどの間に、事業所数は倍以上の113に増加しているから、この道路建設の影響の大きさを物語っている。

そしてこのような農業の商品化や商品経済の浸透と並んで、20世紀前半にも見られた農地開発とりわけ水田開発は引き続き着実に進行した。タイ東北部全体では20世紀後半の間に耕地面積は2倍になった (ရှင်စုံ ဖု.၊ 2546:214-215, 倉橋 2007:67)。灌漑の導入によって一部の地域で2期作が可能になると同時に、広範囲の農地(可耕地)開発が進行したのである。そのことは木材の産出量の増加というかたちでも示され、前出の1961年から66年までの変化の数字によれば、チェンユーン郡の木材(チーク材を除く)の生産高は8.5倍にもなっている。これは県内の他地域の平均と比べても高い値であった (Jittasatra 1967:52)。調査村での聞き取りによっても、1980年ごろまでは、木材の伐採が重要な副業であったことが確認されているが、木材の伐採は農地開墾と密接に絡んで展開したのである。しかし一方では、タイ東北部全体で1980年代頃から過開発がもたらす稲作等の生産性の低下や環境問題が叫ばれるようになったのも事実である。「1950年代ころは東北タイにも緑が残っていたが、いまの東北タイの荒れた土地の惨状は、広大な中央平原の見渡す限りの緑の水田を見慣れた目にとってはあまりにも異様であり、まったく別の世界の感じさえする」と言わしめるまでになったのである (長谷川善彦1992:103)。

3.2 郡社会の再編

このような展開のもとで、人口、家族、地域社会といった基本的社会単位の変化も進んだ。人口や家族の側面で見れば、この間の人口や世帯の増加は著しいことがわかる。郡内における商品的農業の強まりと可耕地の増加が進行したが、それは農家の経営規模拡大に結びついていたのではない。20世紀後半のタイ東北部の農業開発は、一般的にもそのような傾向をもたなかったことは、この間の農家当たりの農地所有規模縮小傾向によっても示される (ရှင်စုံ ဖု.၊ 2546:249)。つまり、全体として農地は増えるものの、それらは農家の子弟に分け与えられ(分割相続され)、細分化されるというプロセスをとったのである。この当時の家族が多産少死に移行して、各家族には5～10名の子供がいたから、農地はこれら子供に分割されたことになる(とくに女子の間での分割が重要)。また子供達自らが耕地の開墾を行って自身の農地を確保することも少なくなかった。その結果、表3のように、1960年時点では人口44000人だったものが、約10年後の1972年には人口67000人、それ以降も10年ごとに1万人の増加が見られる状況である⁷⁾。これに併せて、世帯は1960年から1994年の間に約2倍に増加している。この増加率は、マハーサーラカーム県全体の平均を上回るものであった。

地域社会レベルでみると、村の過密化や空間的肥大化を意味していた。この地方では、子供(とくに娘)の結婚・出産を契機として親子は屋敷地共住集団を形成するので、結果的に集落の人口

7) 1994年から2000年の間に人口・世帯が減少したのは、後述のように、この間に一部の地域が準郡として分離したためである。

は増加した。また既存の集落内に家屋を構えることができない場合は、集落の周辺部へ家屋を拡大したので、集落の膨張が進んだ。さらに開拓された農地に所有地を多く持つ農民たちは、新しい集落（分村）を田園のなかに建設することもあった。以上の経過は、時代は異なるが、形としては日本農村が17世紀に経験したものと似ている面がある。その結果、チェンユーン郡は以前に比べて過密化した農村社会を内部にもつことになり、地域社会とくに村（バーン）の再編成が進んだ。ここでは、図2にしたがって考察する。

まず行政村の増加が顕著である。前出表1をも参考にするとわかるように、ナートーン、スワタウ、ラオブアバーン、ドーンガーン、ノーンクン、クットプラードックという新しい行政村が発生している。行政村数は1965年6から12へと倍増している。人口や世帯の増加率にほぼ対応するものである。これらはいずれも既存の行政村の分割によって生じた。そして1997年からは、元のチュンチョムおよびラオドークマイの大部分はチュンチョム準郡として半独立し、最終的には2007年に正式な郡となったので⁸⁾、チェンユーン郡は現在、8行政村、116区より成り立っている（図では、現在のチュンチョム郡の部分については省略している）。行政村別の人口は、表4のとおりである。

行政村の増加をもたらしたのは、いうまでもなく村落レベルの変化である。1965年には村が複

表3 チェンユーン郡等の人口・世帯の変化

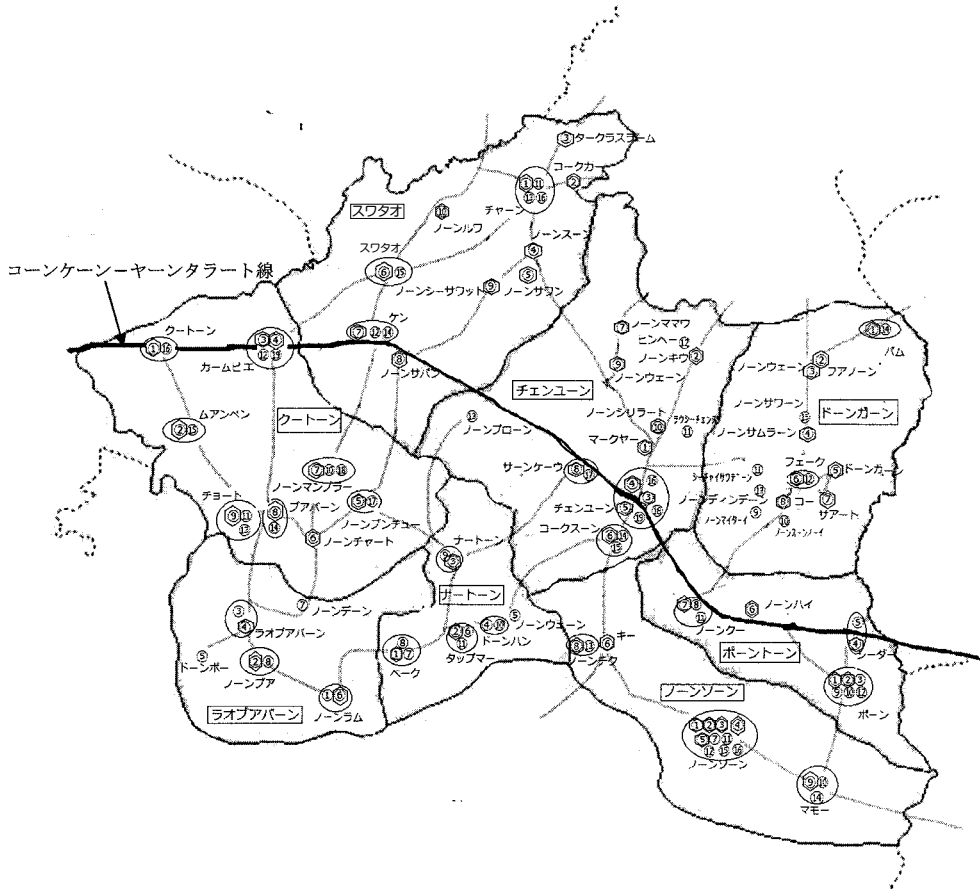
	1960	1972	1980	1994	2000
(マハーサーラカム市)					
人口			32,989	41,174	48,252
家（世帯）	15,680			5,642	9,525
(ムアン郡)					
人口	86,387	117,633	114,111	138,156	148,687
家（世帯）	13,986			21,131	34,965
(マハーサーラカム県)					
人口	499,373	664,608	764,509	908,281	937,860
家（世帯）	79,852			151,437	201,106
(チェンユーン郡)					
人口	44,254	66,847	75,285	84,710	63,004
家（世帯）	7,257			14,085	13,710

注）国家統計局資料より作成

8) 筆者は2001年にこの準郡の役所を訪問してインタビュー調査を行ったことがあるが、その時、当時の準郡長は、「準郡」から「郡」への昇格は政府の財政問題や政策によって次第に困難になっていると語っていたが、2007年ようやくこの準郡も正式な「郡」に昇格した。しかしながら1959年に新設された郡から、40年弱の間に新しい準郡が発生するということに、この間の郡社会の成長を読み取ることができるのであろう。

数の区に分割されたケースはまだ少なかったが、約50年間で多くの村は複数の区に分割されることになった。旧チェンユーン内の行政村チェンユーン、ナートーン、およびスワタオ（ただし一部は旧クートーンに属す）でみれば、チェンユーン、サーンケーウ、コークスーン、ナートーン、ベーク、タップマー、ドーンハーン、ケン、スワタオ、チェーンである。旧クートーン内の行政

図2 現在のチェンユーン郡



注) 現代の行政村や区の状態や配置については、チェンユーン郡役所資料、チェンユーン郡地図 (5 万分 1, 軍最高司令部軍地図局作成, 1995 年版), 筆者の聞き取り, さらに <http://www.mahasarakham.doae.go.th/file/temp> 上の行政村・区一覧表を参考にして作成した。

地図の外枠については、以下のサイトの地図を利用した。

<http://province.m-culture.go.th/mahasarakham/Umpur/chengyuen/umpur.php?id=2>

なお地図における集落や道路の位置はおおよそのものであって、正確な位置関係等を示すものではない。

○で囲まれた数字は現在の区(ムー・バーン)番号である。たとえば①は、第1区であることを示す。区番号はタムボン単位で与えられる。◇(六角形)によって囲まれた区は、1965年時点に存在した区である。○で囲まれた複数の区は、一つの村(バーン)から発生したものであることを示す。ただし図の中の区の配置は、実際の位置関係を示すものではない。

村クートーン、ラオブアバーンでみれば、クートーン、ムアンペン、チョート、ノーンマンプラー、ブアバーン、ノーンブンチュウー、ラオブアバーン、ノーンブア、ノーンラムである。旧ノーンソーン内の行政村ノーンソーン、ポーントーン、ドーンガーン（ただし旧ラオドークマイの一部を含む）では、ノーンチク、マモー、ノーンクー、シーダー、フェーク、パムである。チェンユーン行政村の北側およびドーンガーン行政村を除くと、ほぼ全域にわたって村が複数の区に分割される傾向は続いている。その場合、区を分けても村落名称は変更しないこともあれば、識別するために方角を示す「南」、「北」、「東」、「西」といった語、あるいは「開発」、「新」、「小」の語を名前に付ける加えることがある。このような村の複数区への分割は、行政的な問題としては、より多くの政府予算を獲得するためであるが、一つの村が複数の区に分割されると行政上はそれぞれが独立するので、区長（ผู้ใหญ่บ้าน プーヤイ・バーン）をはじめとした役員が村に複数配置され、それぞれが相対的に独立しながら区の運営を担当することになり、それだけ村の統一性や共同性は弱まる。もっとも寺院や小学校などは従来通りであるので、こうした側面で複数の区が共同運営をすることによって、元の村のまとまりや共同性を維持することが可能である（藤井 2005）。実際、1965年時点での村数は50程度と推定されるが（現チュンチョム郡内分は除く）、この数は現在の小学校数38（ที่ทำการปกครองอำเภอเชียงยืน พ.ศ. 2546を参照）に比較的近い数を示しているし（規模の小さい村には小学校が置かれぬ）、また現在の仏教寺院数51（内2寺はタマユット派）にほぼ一致している（ที่ทำการปกครองอำเภอเชียงยืน พ.ศ. 2546を参照）。

1965年にすでに複数の区が存在したチェンユーン村、ノーンソーン村、ポーン村、カームビエ村ではさらに区の分割が進行し、現在では、それぞれ6, 10, 6, 4の区が置かれるにいたっている。とくに郡の中心地であるチェンユーンの場合、5つの区（3区, 4区, 5区, 18区, 19区）は従来、衛生区（สุขาภิบาล）を形成していたが、1999年には昇格してチェンユーン町自治体（เทศบาลตำบลเชียงยืน）

表4 チェンユーン郡の人口と家（2002）

	男	女	合計	家
チェンユーン町	2756	2814	5570	1670
チェンユーン（上記を除く）	4780	4724	9504	1901
クートーン	5052	5115	10167	2368
スワタオ	4292	4225	8517	1939
ドーンガーン	3553	3614	7167	1556
ノーンソーン	3431	3482	6903	1549
ポーントーン	2948	3077	6025	1286
ナートーン	2982	2915	5897	1280
ラオブアバーン	1877	1813	3690	818
	31661	31779	63440	14367

注）郡役所作成資料による（ที่ทำการปกครองอำเภอเชียงยืน พ.ศ. 2546）。登録上の人口・家数である。家数は、この場合、国民登録の単位であるバーン（家）である。

を設立した（สำนักงานเทศบาลตำบลเชียงยืน พ.ศ. 2548 : 1）。そして現在（ただし2005年頃）、このチェンユーン町には、大規模ガソリンスタンド2、銀行支店（貯蓄銀行、農業銀行、バンコク銀行）3、農業協同組合1、保険会社支店2、生鮮市場1（含：各種食料品店36・衣料品店8）、食堂8、電気製品店10、自動車修理工場4、その他の物品販売店60があり（สำนักงานเทศบาลตำบลเชียงยืน พ.ศ. 2548 : 3）、活発な経済活動が営まれている。市場は常設され、内部には40以上の店が軒を連ねている。1930年代の大規模農村であった時期、そして郡創設期の町が形成された時期と比較しても、チェンユーン町は地方社会の社会経済中心地として、今日、その役割を大いに高めている。また医療機関としては郡病院（60床）1、診療所3（สำนักงานเทศบาลตำบลเชียงยืน พ.ศ. 2548 : 5）がある。さらに表5のように、この間のチェンユーン郡の成長・発展を反映して、今日では郡には数多くの公的機関・施設が設置されているが、郡役所をはじめとした多くの機関・施設はチェンユーン町および周辺に立地しているために、チェンユーン町の郡社会内における重要性はそれだけ高くなっている。

他の大規模集落については、最近になってポーンを含むポーンタウン行政村全体が、「タムボン行政機構」から「町自治体」に再組織化されていることが注目される（<http://www.phonthong.go.th/default.php>を参照のこと）。農村的な行政村全体によって「町自治体」が形成されることは一般的ではないが、マハーサーラカム県でも一部には存在する。またノンソーも複数の区への分割が著しい。表5のように、ノンソーやクートンには警察署が設置さ

表5 郡の公的機関と人員

	公務員数	雇用者数	合計
郡役所	15 (7)	1 (0)	16 (7)
郡森林事務所	1 (0)	—	1 (0)
郡公衆衛生事務所	34 (19)	—	34 (19)
チェンユーン郡支部税務事務所	4 (1)	1 (0)	5 (1)
郡農業事務所	11 (3)	1 (1)	12 (3)
チェンユーン町自治体事務所	5 (2)	14 (2)	19 (4)
郡初等教育事務所	10 (2)	—	10 (2)
郡コミュニティ開発事務所	8 (6)	—	8 (6)
郡徴兵所	3 (0)	—	3 (0)
郡土地事務所	1 (0)	—	1 (0)
郡教育行政事務所	6 (2)	—	6 (2)
郡学校外教育センター	2 (1)	5 (4)	7 (5)
初等教育学校	444 (221)	32 (0)	476 (221)
中等教育学校	110 (58)	20 (0)	130 (58)
チェンユーン郡地方警察署	108 (1)	—	108 (1)
クートン行政村地方警察署	38 (0)	—	38 (0)
ノンソー行政村地方警察署	18 (0)	—	18 (0)

注) 郡作成資料による（ที่ทำการปกครองอำเภอเชียงยืน พ.ศ. 2546）。2003年頃の数字である。
なお公務員数と雇用者数の合計が合計数と一致しない箇所も若干あったが、基本的には内訳数にもとづいて記入している。

れているので、幾つかの行政村の中心集落への機能分散がみられるといえよう。郡の中での副次的な中心地がこのようなかで部分的に形成されつつある。

4 郡とムアンーむすびにかえてー

郡社会としてのチェンユーンは20世紀半ばという、比較的新しい設立ではあるが、農地開発の進行や商品経済の浸透のなかで成長・発展してきた。人口・世帯の増加、それに対応した地域社会の稠密化、行政区画の再編成といった事態が進行した。そのなかで、新郡であるチェンユーンのなかから、半世紀の間にさらに新しいチュンチョム郡という新郡が成立し、独立したことも興味深い。まさに細胞が分裂するように、親郡から子郡が生まれ、その子郡から孫郡が生まれている。1世紀間にわたって郡社会は継起的に生み出されてきたというのが、タイ東北部における地方社会の展開の基本である。

継的に生成する郡の内部で村落と中心地町の関係が重要な意味をもつことは、すでに別稿で論じたところである（藤井 2007・2009）。そもそもタイ族の伝統的なムアン社会では、ムアンは支配者が統治する領域だけでなく、支配者の拠点がある中心地の町をも意味することに示されるように、ムアン社会では中心地の町と周辺地域＝村落の関係が重要な意味をもった。前記の調

表6 チェンユーンに行く頻度（N村3区）

		ほとんど 毎日	週の半分	月に数回	月に1回	年に数回	年に1回	5年に 1回以下	無回答 (なし)	合計
男	0 - 9	13.3	3.3	23.3	23.3	3.3	3.3	—	30.0	100.0 (30)
	10 - 19	7.5	5.0	30.0	20.0	7.5	—	—	30.0	100.0 (40)
	20 - 29	23.8	4.8	9.5	9.5	14.3	9.5	—	28.6	100.0 (21)
	30 - 39	23.7	2.6	39.5	7.9	5.3	—	2.6	18.4	100.0 (38)
	40 - 49	25.0	4.2	41.7	8.3	4.2	4.2	—	12.5	100.0 (24)
	50 - 59	10.0	10.0	13.3	20.0	30.0	6.7	3.3	6.7	100.0 (30)
	60 -	8.3	12.5	20.8	12.5	16.7	4.2	8.3	16.7	100.0 (24)
	合計	15.5	5.8	26.6	15.0	11.1	3.4	1.9	20.8	100.0 (207)
女	0 - 9	8.0	4.0	32.0	8.0	20.0	4.0	—	24.0	100.0 (25)
	10 - 19	10.7	17.9	17.9	14.3	3.6	7.1	—	28.6	100.0 (28)
	20 - 29	25.0	—	20.8	8.3	12.5	8.3	—	25.0	100.0 (24)
	30 - 39	35.1	2.7	29.7	13.5	2.7	2.7	2.7	10.8	100.0 (37)
	40 - 49	22.2	11.1	18.5	22.2	11.1	—	—	14.8	100.0 (27)
	50 - 59	6.7	3.3	23.3	20.0	26.7	6.7	—	13.3	100.0 (30)
	60 -	4.0	24.0	8.0	12.0	8.0	12.0	—	24.0	100.0 (25)
	合計	16.8	8.7	21.9	14.3	11.7	5.6	1.5	19.4	100.0 (196)

注) 合計欄の（ ）内は実数。あとの数字は全て「%」である。ただし無回答分には、「行かない」もかなり含まれると思われる。

査村（居住者の主な職業の約7割が農業であり、同時に副業を持つ者も多い。バンコク等への出稼ぎ者も少なくない。）で2004年に農村－都市関係のアンケート調査を実施したが（この村は3区と9区からなるが、3区のみ実施）、その結果によってもこの特質は明確に示されている。

表6のように、チェンユーン町へ行く回数は（世帯主に対して世帯員全員の状況を聞いたものである）、男子（207名）では、「ほとんど毎日」が約15%、「週の半分」が約6%、「月に数回（週1回以上）」が約27%となり、それらだけで5割近くに達する。女子（196名）については、「ほとんど毎日」が約17%、「週の半分」が約9%、「月に数回（週1回以上）」が約22%となり、やはり5割近くになる⁹⁾。つまり日常生活の一部にチェンユーンが組み込まれている者の割合が高い。またこの質問は就業や教育を除いた頻度を聞いたものなので、それらを含めるとさらに高い割合になる。世代的には、男女とも中年層においてとくに高い傾向があるが、これは、子供層は平日には学校と自宅を往復すること、高齢者層は身体的に村の外に出にくいことに起因するであろう。

郡中心地を中心とする郡内における往来、そして社会関係の形成を通じて郡の統合が形成されるとともに、さらに進んで文化を共有するものとしての郡社会が形成されている。この点もムアンの伝統であり、タイ族のムアンに関する研究のなかでは宗教文化つまり仏教寺院などの宗教施設が存在が重視されてきたが、それらの存在はムアンに属し、そのもとで生きる人々のアイデンティティにも関わるものであろう（Raendchen and Raendchen 1998：11）。タイ国ではラック・ムアン（หลักเมือง）＝ムアンの柱（柱神）をムアンの中心に置いて、地方社会のシンボルにするとされている。もっとも地域の人々の話などによれば、ラック・ムアンはいわゆる柱状のもののみを意味するのではなく、ムアンを象徴したり、守護したりする宗教的構造物全体の総称であり、さまざまな形態がある。たとえばマハーサーラカム県では、県を守護するナードゥーム仏塔（พระธาตุนาถุม บราตาร์ท・ナードゥーム）が最重要のラック・ムアンとなっている。この仏塔はタワラワディー時代まで建立が遡ると伝承されており、のちに移住してきたラーオ族の信仰の対象となり、修復もなされ、マハーサーラカムがムアンとして自立する中でムアンを守護する宗教施設となった。現在では、毎年1回、県知事をはじめとした県内のすべての地域役職者（区長なども含む）が一堂に会し、盛大な宗教行事が行われ、隣県の主だった役職者もさらに加わるという。

郡レベルでは、小ムアンの歴史をもつ隣接郡、つまりカンタラウィチャイやコースムビサイにも同じような宗教施設がある。カンタラウィチャイ郡の場合は、ムアン吉祥（あるいは守護）仏像（พระพุทธรูปมิ่งเมือง プラプットループ・ミン・ムアン）とムアン縁起仏（พระพุทธรูปมงคลเมือง プラプット・モンコン・ムアン）の2仏陀立像をムアンの守護仏としてきたが、その歴史は古いと言われている。セーマー（結界石）の碑文（ただし現在は不鮮明になっている）からすれば仏暦1399年

9) ただし調査では、「無回答」の割合が高かったので、数字の信頼性は不十分な面がある。その理由は、質問の選択肢に「行かない」を入れなかったことが影響している。つまりこの「無回答」のなかにはかなりの割合で「行かない」が含まれていると考えられる。というのは、「無回答」の割合は、対チェンユーン（約2割）→対コーンケーン（約4割）→対マハーサーラカム（約6割）→対バンコク（約8割）の順番で増えているからである。チェンユーンに「行かない」のは高齢者や子供を除くと希であることを考えれば、この質問にとつての本来の「無回答」はかなり低いと推定される。

（西暦856年）の創建だと言われている。また別の歴史文書に従えば、本稿の最初に述べたように、この地にはかつてムアン・カンターティラートがあり、何代目かの王は息子のリントーン王に殺害されたと伝承されているが、そのリントーン王が建立したのがこの仏像であると言われている（「スワンナワート寺の来歴（ประวัติ ศิวรณาวาส）」などを参照）。いずれにしても、古くから存在したものが、後に移住してきたラーオ族によって受け入れられ、やがてムアン形成とともにムアンを守る宗教施設へと変容したのである。コースムピサイ郡の場合も、町の中心部近くにムアン吉祥（あるいは守護）仏（พระมิ่งเมือง プラ・ミン・ムアン）が安置された場所がある。これはすでに述べた郡の紹介文に「仏像」として出てくるもので、その起源はクメール期に遡るとされる。かつてこの地方の民族によって建立されたが、その後に移住してきたラーオ族によって信仰対象として継承され、やがてムアンの守護仏になった。つまり19世紀後半にマハーサララカームの王族等が移り住み、さらに農民達（王族の登録農民も含む）も移住・定着するなかで、仏像とそれを納める祠が人々の手によって改修・整備された。1959年には、コースムピサイ郡区の僧長によって、さらに整備され、名前がムアン吉祥（あるいは守護）仏（หลวงพ่อมิ่งเมือง ムアンボー・ミン・ムアン）と命名された。1962年には公的に祭事日程が定められるとともに、今日のムアン吉祥仏（พระมิ่งเมือง プラ・ミン・ムアン）と再命名された（「プラ・ミン・ムアンの来歴（ประวัติ พระมิ่งเมือง）」などを参照）。これらの仏像が現在のようにムアンの守護仏になるまでには途中ではなかば遺棄された時期もあったろうし、現在鎮座する場所に長らくあったのでもないと思われるが、地域社会、とくに郡社会の形成・発展とともに整備され、仏像の位置づけが明確になったのである。

1959年に新設されたチェンユーン郡には引き継ぐべき歴史的仏教遺跡は存在しなかったようであるが、資料1のように、1969年にムアン吉祥（あるいは守護）仏「(พระพุทธรูปมิ่งเมืองปราบุดต์・ミン・ムアン)、通称チェンユーン・ムアン大仏（เขื่องขึ้นเมืองพระใหญ่ チェンユーン・ムアン・プラヤイ）を郡長、行政村長、区長を中心として、すべての郡内の人々の協力で建設したと、仏像の安置所には書かれている。1999年には改修されて、現在も信仰の場として機能している（写真1参照）。カンタラウィチャイやコースムピサイのような伝統性を表出する雰囲気はいまだもってはいないが、敷地内にあるラック・ムアンの石柱とともに、小ムアンのシンボルとなって、チェンユーンの繁栄を見守る存在として定着していることは確かであろう¹⁰⁾。実際、この仏像はチェンユーン郡やチェンユーン町自治体が作成する報告書や資料集の表紙を飾るなどしているから、郡社会公認の宗教シンボルなのである（ที่ทำการปกครองอำเภอเขื่องขึ้น พ.ศ. 2546, สำนักงานเทศบาลตำบลเขื่องขึ้น พ.ศ. 2545・2548）。

10) チェンユーン郡のラック・ムアン石柱はリング（男根）であり、これはヒンドゥー教の宗教シンボルである。タイでは仏教とヒンドゥー教は共存しており、仏教寺院のなかにリングが置かれ、仏像とともに信仰されていることが少なくない。タイ東北部のもっとも有名な宗教施設であるパノム仏塔（พระธาตุพนม プラタート・パノム）でも、仏塔の傍らにはリングが置かれ、ともに民衆の信仰の対象となっている。なおチェンユーン町の地元の人のからの聞き取りによれば、チェンユーン町で行われる宗教儀礼や祭礼へは郡内からたくさん人が集まるとのことであったが、周辺村落での聞き取りによれば、必ずしも参加は増加していないということであった。むしろコーンケーンの祭りに行く人が年々増加しているとも述べている。祭り好きのイサーンの人々はコーンケーンの大規模な祭礼に参加することに魅力を感じるのであろう。もっとも地元の古老などによれば、他のムアンのラック・ムアンに参拝することは一般的ではないとされている。

資料1 チェンユーンの大仏の安置所に書かれた由緒

由来

ムアン吉祥仏とラック・ムアンの廟は、仏暦2512年（西暦1969年）に建設を始めた。チェンユーン郡の人々そしてチュンチョム準郡が建設の遂行ために共に支援し、資金や財産を上奏した。これによってチェンユーン郡の郡長（オヌチャート・ケーウウィラット氏）はこの建設を発案し、行政村長（กำนัน）—区長（ผู้ใหญ่บ้าน）—村人と共同作業をした。

第1回目の修繕は、2542年（西暦1999年）8月にチェンユーン町自治体、チェンユーンの人々、それから一般、すなわちチェンユーン郡／チュンチョム準郡／コーンケンそしてバンコクの人々が出した資金によるものである。

写真1 ムアン吉祥仏（チェンユーン）



注）筆者撮影（2009年）

写真2 土地神（チュンチョム）



注）筆者撮影（2009年）

さらに興味深いのはチェンユーン郡から分立したチュンチョム郡にも類似の宗教的施設が建立されていることである。チュンチョム郡は2007年に正式な郡として発足したが、その約6ヶ月後の2008年2月20日に郡役所の敷地の南側にコークカーウ土地神（เจ้าพ่อโลก้าว ชาอโปー・コークカーウ）の祠が建立された（写真2）。小さな祠であり、郡役所の職員などによれば、この土地神はラック・ムアンではなく、この郡にはラック・ムアンはまだ存在しないとの説明であったが、この土地神をラック・ムアンの原初的な形態であるとみなすことができよう。つまり現代社会のなかで新しく創設される郡さえも、ムアンの論理を継承していることを示している。ムアンの文化は今日に至るまで郡レベルにおいても重要な意味をもち、民衆によって絶えず創造されていると理解してよからう。タイ東北部の地方社会に生きる人々の望むのは、このようなムアンとの一

体性のなかでの生活の充実と安定である。ムアンの伝統に生き、それを社会構成原理の基本に据えてきたタイ族の「心性」がそのなかに示されているといっても過言ではない。

〔文献〕

（日本語）

- 柿崎一郎, 2000『タイ経済と鉄道：1885～1935』日本経済評論社。
- 倉橋孝行, 2007『タイの森林消失：1990年代の民主化と政治的メカニズム』明石書店。
- 坪内良博, 1980「タイ農村研究への視角—故水野浩一教授の業績をめぐって—」（『東南アジア研究』18-2, 京都大学東南アジア研究センター）。
- 長谷川善彦, 1992『タイ農業が警告する：21世紀の食糧問題』農山漁村文化協会。
- 橋本卓, 1999a・b「タイにおける地方制度改革の動向と課題（一）（二・完）」（『同志社法学』50-4・5）。
- 星川圭介, 2009「東南アジア地域研究への応用：東北タイにおける稲作立地条件の変化」（『空間情報学』科学研究会 2009年3月16日）。
http://www.humeco.m.u-tokyo.ac.jp/individuals/umezaki/PDF_files/Hoshikawa_atami2009.pdf
- 星野龍夫, 1990『濁流と満月：タイ民族史への招待』弘文堂。
- 藤井勝, 2003「20世紀における東北タイ村落発展史の一断面：マハーサーラカム県チェンユーン郡の事例」（『名古屋大学社会学論集』24, 名古屋大学文学部社会学研究室）。
- , 2005「東北タイ村落の伝統と現代」（北原淳編『東アジアの家族・地域・エスニシティ：基層と動態』東信堂）。
- , 2007「東南アジア大陸部における農村—都市関係の展開」（『社会学雑誌』24, 神戸大学）。
- , 2009「タイ東北部村落社会の《家—村》論的考察」（『年報・村落社会研究』44, 日本村落研究学会）。
- , 2010「東アジアの『地方的世界』の基層と現代に関する一考察：日本の国・郡を中心に」（藤井勝代表『東アジアの「地方的世界」の基層・動態・持続可能な発展に関する研究〔平成19～22年度科学研究費補助金研究成果報告書・平成20年度〕』神戸大学）。
- , 2011「タイ東北部における近代地方制度導入と地方社会の再編：モントンとムアンを中心にして」（『神戸大学文学部紀要』38, 神戸大学文学部）。
- 水野浩一, 1966「東北タイの南部地域」（『東南アジア研究』4-1, 京都大学東南アジア研究センター）。
- , 1981『タイ農村の社会組織』創文社。

（タイ語）

- ที่ทำการปกครองอำเภอเชียงยืน, พ.ศ. 2546 (2003) ข้อมูลพื้นฐานของอำเภอเชียงยืน (チェンユーン郡役所 2003『チェンユーン郡の基礎情報』)。
- สำนักงานเทศบาลตำบลเชียงยืน, พ.ศ. 2545 (2002) รายงานผลการดำเนินการเทศบาลตำบลเชียงยืน ประจำปี พ.ศ.2544-2545 (チェンユーン町自治体事務所, 2003『チェンユーン町自治体実施結果報告』)。
- สำนักงานเทศบาลตำบลเชียงยืน, พ.ศ. 2548 (2005) บรรยายสรุปเทศบาลตำบลเชียงยืน (チェンユーン町自治体事務所 『チェンユーン

町自治体の解説』).

สำนักงานสถิติแห่งชาติ, พ.ศ. 2508 (1965) รายชื่อ จังหวัด อำเภอ ตำบล หมู่บ้าน ภาคตะวันออกเฉียงเหนือ (国立統計事務所, 1965 『チャンワット, アンブー, タムボン, ムー・バーン 東北部』).

สุจิตต์ วงษ์เทศ, พ.ศ. 2549 (2006) “พลังงาน” ชาวอีสาน มาจากไหน? สำนักพิมพ์มติชน (สชิตต์・ウオンテット, 2006 『「ラーオのエネルギー」 イサーン人はどこから来たか?』 マティション出版).

สุวิทย์ วีระจรัส และ ดารารัตน์ เมตตาริกานนท์, พ.ศ. 2538 (1995) ประวัติศาสตร์อีสาน : หลังสงครามโลกครั้งที่สองถึงปัจจุบัน สำนักส่งเสริมศิลปวัฒนธรรม มหาวิทยาลัยขอนแก่น (สวูวิท・เทินซาร์ทวัต, ดาร์ラーラット・เมータリカーン 『イサーン史—第二次世界大戦から現代まで』 コーンケン大学芸術文化振興センター).

สุวิทย์ วีระจรัส, พ.ศ. 2546 (2003) ประวัติศาสตร์เศรษฐกิจชุมชนหมู่บ้านอีสาน 2488-2544, สำนักพิมพ์สร้างสรรค์ (สวูวิท・เทินซาร์ทวัต, 2003 『イサーン村落共同体の経済史 仏暦2488-2544』 創造出版).

(欧文)

Chamruspant, Viyouth et al. 1992 Summary Report Social-Cultural Change and Political Development in Thailand, 1950-1990; the Northeast, Research and Development Institute, Khon Kaen University.

The Committee on Development of the Northeast, 1961 The Government of Thailand: the Northeast Development Plan 1962-1966, The Planning Office, the National Economic Development Board, Office of the Prime Minister.

Fujii, Masaru, 2007 “Interim Report of Rural-Urban Relationship in Thailand; A Case of Northeastern Thai Village” (竹内隆夫代表『二一世紀東アジアの農村—都市関係の展開に関する研究』(基盤研究B) 報告書, 立命館大学).

Jittasatra, Nit, 1967 Economic Effects of the Khon Kaen – Yang Talad Feeder Road in Northeast Thailand, a thesis of master degree, SEATO Graduate School of Engineering.

Keyes, Charles F. 1966 Peasant and Nation: A Thai-Lao Village in a Thai State, Ph. D Dissertation, Cornell University.

Mizuno, Koichi, 1971 “Social System of Don Daeng Village : a community study of Northeast Thailand”, ch.1 ~ ch.9, Discussion Paper, Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University, No.12 ~ No.22.

Phongpaichit, Pasuk, and Chris Baker, 2002 Thailand: Economy and Politics (2nd edition), Oxford University Press (= パースック・ボンパイチット, クリス・ベーカー, 2006 『タイ国—近現代の経済と政治』〔北原淳・野崎明監訳, 日タイセミナー訳〕刀水書房).

Raendchen, Oliver, and Jana Raendchen, 1998 “Present State, Problems, and Purpose of baan-mü ang Studies”, Baan-mü ang: Characteristic Features of Tai Social Structure (Tai Culture, Vol. III, No.2), SEACOM Edition, Tien-Huu Verlag.

Yatsushiro, Toshio, 1968 Studies of Northeast Villages in Thailand, Vol. I・II, USOM.

※なお報告書としての正式なタイトルは, “Reports on Resulting from Intensive Village Studies Focused on Rural Security and Related Conditions”である。